

韓国・慶尚南道南海島における観光体験村の運営

Analysis of the Management of the Tourism Experience Villages in Namhae-island
Gyongnam, Korea鄭 玉 姫*
JUNG, Okhee

Abstract: The aim of this research is to clarify management of the tourism experience in Korean villages, especially on Namhae-island, Gyongnam Province, which is home to a national policy project pertaining to the tourism experience. Namhae-island is in a coastal area near the southern tip of Korea. This project by the Korean government has been underway since 2001 to promote regional development through tourism experience in rural regions.

The project encompasses experiences from 15 villages on Namhae-island. Types of village experiences include agricultural life, fishing life, and traditional culture. Seven of the 15 villages were chosen for conducting a survey on village management. The findings are as follows: Experience that includes recreation on the tidal flats is popular among tourists. Overall, participation levels from residents in village management have been low because the priority of individual activities. However, many people have participated in the “fishing experience village” because there are more residents who, being fishers in their daily lives, are well equipped to participate. The villages operate such facilities as information centers, overnight accommodations, and a parking lot for tourists. However, the operation of shops that sell agricultural products is limited. Therefore, the study suggests methods to boost sales of agricultural products.

Key words: 農村観光政策 (rural tourism policy), 観光体験村 (tourism experience village), 地域活性化 (regional development), 慶尚南道南海島 (Namhae-island Gyongnam Province)

- I はじめに
- II 韓国における観光体験村の政策的推進
 - 1) 観光体験村事業の展開
 - 2) 観光体験村の事業領域と事業に対する評価
- III 南海島における観光体験村の運営実態
 - 1) 南海島の概要
 - 2) 南海島における観光体験村と観光客の変化
 - 3) 観光体験村の取り組み
 - 4) 利用施設の現況
- IV おわりに

*立教大学観光学部・助教

I はじめに

韓国の農村は、地域社会としての機能と役割をこれまで担ってきた。しかし、経済開発に代表される量的成長を優先とする国家の産業政策に取り残され、都市との格差は深刻になってきている。さらに、少子高齢化、農家所得減少をはじめ、教育・医療・文化等の面における劣悪な定住環境といった内部的要因に加えて、農産物開放や自由貿易協定（FTA）等の外部的要因によって深刻な危機に陥っている（アン、2007）。

韓国政府は農漁村地域の経済活性化を目標に掲げ、1984年より農村観光政策を実施した。農外所得源創出を目的とする農村観光政策としては、観光農園、週末農場、民泊事業が代表的である。ここでいう農外所得とは都市住民との交流によって得られるものとし、その中心を農村観光が占めている。

近年、体験中心の観光が注目される中、2000年代に入ってから、観光体験村事業が推進されている。観光体験村とは韓国政府の支援事業を受けている集落をいい、農林畜産食品省の「農村体験村」、海洋水産省の「漁村体験村」、農村振興庁の「農村伝統テーマ村」、山林庁の「山村生態村」等があげられる。観光体験村は地元住民の生活の質を向上させると同時に、地域の歴史と伝統文化を継承保存しつつ事業運営と農産物の販売による収入が住民の家計に一役買うものと期待されている（ソン・イ、2014）。

観光体験村は、従来、個人事業者を中心に運営されてきた観光農園や民泊事業とは異なり、集落単位の運営を特徴とする。そこでの事業運営は行政頼りではなく、事業計画、進行、決算といった一連の過程を集落全体で全て担うことであり、このため、地元住民の積極的な参加が求められる。

観光体験村運営に関する研究の傾向をみると、まず、オム（2006）が、観光体験村のインターネットポータルサイトから体験メニュー、利用施設等に注目して観光体験村の現況を分析している。それに対して、アン（2007）は、住民参加の側面から観光体験村を分析し、集落の指導者と住民の間の協力体制の構築と観光体験村事業による利益の

住民への還元がその運営には欠かせないと指摘した。実際に、観光体験村の運営による農家収入の増大なしに事業運営の主体である農村住民参加は期待されにくくなる（チョンほか、2009）。

しかしながら、コ（2008）は観光体験村の意義として事業性のみを強調してしまうと、地域内共同体の瓦解を招く結果につながると指摘し、観光体験村の運営は事業性の追求と地域共同体の強化の両面を考慮した、「共同体の組織化」を目指すべきであると主張した。集落単位で行われる観光体験村だからこそ、住民の参加が不可欠である。

以上をふまえて、本研究では、観光体験村の運営が組織の運営システムの条件によって左右されることを認識しつつ、観光体験村の運営がどのように行われているかを明らかにすることを目的とする。事例研究地として、慶尚南道南海島を選び、南海島内観光体験村の運営組織の実態を考察した。

南海島には、15カ所の観光体験村が整備されている。この数字は、一つの行政区域がもつ観光体験村数としては、全国的に見て上位を占める数字に相当する。2013年に南海島内の観光体験村を訪れた観光客は38.5万人にのぼる。

研究の手続きであるが、まず、観光体験村の運営実態を把握すべくアンケート調査を実施した。15カ所の観光体験村宛にアンケート票を郵送し、10カ所から回答が得られた（2015年3月実施）。アンケート項目は、観光体験村事業の推進内容、事業実績、住民参加に関するものである。次に、代表的な観光体験村（文巷、鎭浦、虹峴、赤梁、新興）を訪問し、関係者および地元住民を対象にインタビュー調査を実施した（2015年8月実施）。

II 韓国における観光体験村の政策的推進

1) 観光体験村事業の展開

観光体験村は農林水産食品省をはじめとする韓国中央政府5部署が主管して推進する支援事業の対象となっている集落を指す。企画段階から住民発議による公募が行われ、厳正なる審査を通過した観光体験村に支援が行われている。

観光体験村の事業目的は、漁村体験村を例にあ

げてみると、「①漁業体験を中心に漁村の自然環境、生活文化等と連携した観光基盤施設を造成し、漁業人の漁業外所得増大および漁村経済活性化を図ること」であり、「②都市住民に漁村との交流拡大および自然と共生する休憩・余暇空間を提供すること（海洋水産省、2014）」である。ほかの観光体験村の目的も上記と同様とみなされ、都市住民の農漁村地域への訪問にもなって地域活性化を実現することである。

2001年以降、観光体験村は全国1,918カ所で整備された（表1）。具体的には農林水産食品省の主管する「緑農村体験村」（以下、農村体験村と表記）が最も多くて571カ所、行政安全省の「情報化村」が400カ所、農林水産食品省の「農村地域総合開発事業」が392カ所、山林庁の「山村生態村」が242カ所、農村振興庁の「農村伝統テーマ村」が170カ所、農林水産食品省の「漁村体験村」が107カ所である。

表1でわかるように、類似したテーマを持つ事業が韓国全土にわたって整備されている。上述したように、観光体験村事業は、集落を単位とする「集落共同経営」の方式をとり、個人を対象に実施してきた従来の観光事業とは異なる。この独特な事業経営方式にほかの中央部署も乗り出すようになったという（パクほか、2012）。

事業の推進時期をみると、1995年から山林庁により「山村生態村」が推進され、2001年以降、さらに7つの事業が推進されている。「農村体験村」を含む8つの事業のうち、6つの事業が2014年をもって終了した。中でも行政安全省の「美しい村」事業は、事業期間の2001年～2004年に23カ所が指定されている。

観光体験村の造成に関わる事業費は、いくつかの地域を束ねて推進する「農村地域総合開発事業」が圏域当たり40～70億ウォンを供出する場合、大規模事業となる。それ以外は村当たり2～

表1 韓国における観光体験村造成現況（2011年）

(単位：カ所、億ウォン)

担当部署	関連事業	事業期間	造成集落数	投入予算	支援内容
農林水産食品省	農村地域総合開発事業	2004～2017 圏域当たり5年	392	8,849	圏域当たり40～70億ウォン (国費80%, 地方費20%)
	緑農村体験村	2003～2013 村当たり1～2年	571	1,042	村当たり2億ウォン (国費50%, 地方費50%)
	漁村体験村	2001～2013 村当たり1年	107	702	村当たり5億ウォン (国費50%, 地方費45%, 村負担5%)
行政安全省	情報化村	2001～2014 村当たり3年	400	1,658	村当たり3億ウォン (国費50%, 地方費50%)
	美しい村	2001～2003 村当たり3年	23	435	村当たり国費10億ウォン
文化観光省	文化歴史村	2004～2009 村当たり2年	13	239	村当たり10～30億ウォン (観光振興開発基金および地方費)
農村振興庁	農村伝統テーマ村	2002～2009 村当たり2年	170	340	村当たり2億ウォン (国費50%, 地方費50%)
山林庁	山村生態村	1995～2017 村当たり3年	242	3,364	村当たり14～16億ウォン (国費70%, 地方費30%)
合計	8つ事業		1,918	16,629	

注1) 造成集落数は造成済みと造成中の集落の合計である。

2) 投入予算は国費、地方費および一部集落の自負担を含めたもので、2010年末現在である。

3) 農林水産食品省（2012）資料をもとに修正。

(資料：パクほか（2012）：農村観光の新たな方向と政策課題，p.40より転載)

5億ウォンの規模が多く、「美しい村」と「文化歴史村」，「山村生態村」は10～30億ウォンが交付されている。その事業費は、国費と地方費、自己負担で賄われる。特に、集落が自己負担する費用は、「漁村体験村」のみ必要とされる。このため、「漁村体験村」の事業導入時には住民らの同意が求められる¹⁾。事業費は、おもに体験館と総合案内所、食堂、宿泊施設等の利用施設の建設に充てられる。

2) 観光体験村の事業領域と事業に対する評価

観光体験村は、農漁村体験メニューの提供をはじめ、農・特産物の加工・販売事業、農家宿泊、飲食物販売等を集落の状況に合わせて運営する点で、いわば、農業と第2・第3次産業を連携させた複合事業化を目指している(アン, 2007)。観光体験村で宿泊と飲食物販売を行うためには、「体験・休養村」に登録しなければならない。2008年に都市と農村の交流の推進を目的とする“都市と農村の交流促進法”が制定されるとともに「体験・休養村」事業が実施された。同法の制定をきっかけに、宿泊と飲食販売の運営が可能となり、その際に宿泊業規定等関連法律の規制緩和がなされた²⁾。2013年現在で、韓国全国に803カ所の「体験・休養村」が登録されている³⁾。これは、1,900カ所の観光体験村の42.2%に相当する。

海洋水産省⁴⁾は「漁村体験村」運営に対し評価制度を設けている。これは、漁村体験村間の競争および情報共有と、漁村観光の活性化等を図ることが目的である(海洋水産省, 2007)。具体的には2006年から「漁村体験村コンテスト」が実施され、集落内の運営体制、住民参加状況、運営効果等が評価される。2015年には「漁村体験・休養村」運営に対し「等級審査制度」⁵⁾が実施され、景観・サービス、体験、宿泊、飲食の4部門に分けて評価が下されている。同制度の実施初年度となる2015年には、審査をとった7つの集落が、すべての部門で一等に評価された集落に与えられる「一等集落」⁶⁾となった。

Ⅲ 南海島における観光体験村の運営実態

1) 南海島の概要

韓国・慶尚南道の西端に位置する南海島(ナメ)は韓国で5番目に大きい島嶼である。正式的な行政区画は南海郡である。1973年6月に本土慶尚南道河東郡と南海島雪川面の間を結ぶ南海大橋が完成したことによって、住民と観光客の行き来が容易となった(南海島誌編纂委員会, 2010)。南海島を中心とする100km圏には、釜山市、蔚山市、大邱市が位置している(図1)。これらの大都市は南海島の観光体験村の主要集客圏である⁷⁾。

南海島内の人口推移をみると、1983年から2013年までの30年間に、96,762人から47,977人へと半数近くまで減少しており、島内の世帯数は、21,267戸から22,325戸へ微増している(表2)。

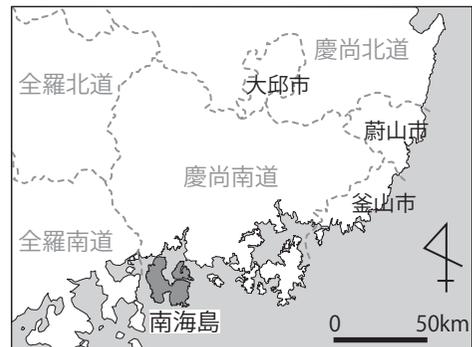


図1 南海島の位置

表2 南海島の人口、農漁家の推移

(単位: 戸, 人, %)

区分	世帯数	人口
人口	1983年	96,762
	2013年	47,977
	増減率	(-50.4)
農家	1983年	72,099
	2013年	16,210
	増減率	(-77.5)
漁家	1983年	12,851
	2013年	7,758
	増減率	(-39.6)

(南海島各年度統計年報より作成)

また、65歳以上の年齢層は年々増加しており、2013年には15,354人で南海島の総人口の32.0%を占めている。そこで、総人口に対する高齢化の状況を島内の行政区画である邑・面別でみると、行政機関や銀行等の施設が密集する南海邑と大規模漁港を擁する彌助面を除くすべての地域で高齢者率は30%以上に達しており、高齢化が進行していることがわかる(図2)。

農家世帯数に対して、1983年から2013年までの30年間の世帯数の推移は、15,843戸から7,695戸へと51.4%も減少しており、農家総人口のそれは、72,099人から16,210人へとこの30年間で8割近い減少を示している。特に、南海島内の全世帯数に対する農家世帯数は、1983年の74.5%から2013年の34.5%にまで減少した。2013年現在、漁家世帯は南海島内の全世帯数22,325戸の13.2%を占めており、漁家人口は7,758人である。特に、1983年の12,851人と比較すると、この20年間で漁家人口は4割減少している。

こうしたなか、専業農家は1982年の10,935戸から2010年の4,173戸に6割減少しており、この20年間で専業農家の減少が著しい。南海島では高齢化が進化していく上に、世帯ごとの就業は、農漁業以外の兼業化が進んでいる。

南海島の特産品としてはニンニクがあげられ

る。その栽培面積と生産量は、全国の5%、慶尚(南北)道内に限れば35%を占めており、ニンニクの農業生産額は、南海島内の農業生産額の30%を占めている。大半の農家でニンニクを栽培しており、それは主要な収入源となっている(鄭, 2015)。特に、ニンニク茎取りを体験メニューとし、観光客を受け入れる集落も存在する。

2) 南海島における観光体験村と観光客の変化

2013年の南海島年間観光客数⁸⁾は657.8万人であり、このうち観光体験村訪問客はわずか5.8%を占めるにすぎない。その反面、観光体験村を訪れた観光客数は2010年の9.1万人から2013年には38.2万人と著しい増加を示している。将来的に観光客数の増加が期待される中で、観光体験村は島内の主要観光地として定着していくものと推測される。

図3は島内における15カ所の観光体験村の分布と体験客数の推移を示したものである。その内訳をみると、漁村体験村が7カ所で最も多く、農村体験村が6カ所、農村伝統テーマ村が2カ所である。観光体験村は、おもに海岸部の近くに位置する集落で多く、すべての観光体験村で海での体験メニューを有している。

観光体験村を訪れた体験客数の推移をみると、

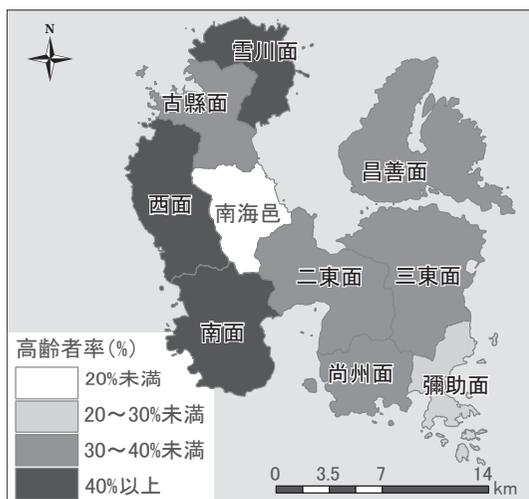


図2 南海島の邑・面別高齢者率(2013年)
(南海島の統計年報より作成)

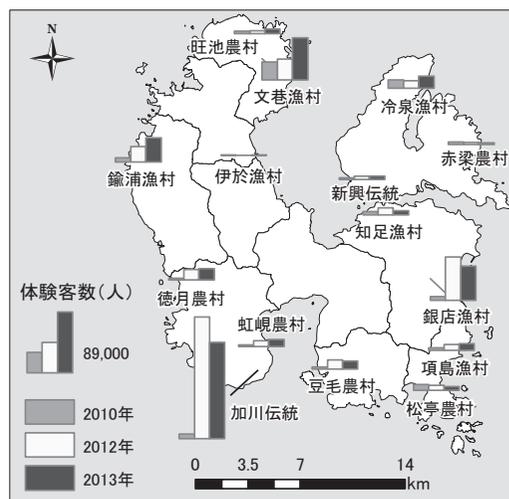


図3 南海島の観光体験村における体験客数の推移
(2010, 2012, 2013年)
(〔2010年と2013年農漁村体験休養集落運営現況〕)

最近3年間に体験客数が増加した集落は、6カ所（旺池、文巷、鎗浦、虹峴、項島、冷泉）であり、体験客数に変化がなかったのは、3カ所（伊於、徳月、新興）、体験客数が減少したのは、6カ所（加川、豆毛、松亭、知足、銀座、赤梁）である。2013年に体験客数が最も多かったのは、141,682人の体験客が訪れた加川集落であり、ほかに文巷集落（53,000人）、銀座集落（50,544人）、鎗浦集落（35,500人）が多い。一方、赤梁集落（2,680人）と、伊於集落（180人）は少ない。

韓国の中でも珍しい棚田を地域資源とする加川集落と、広大な干潟で潮干狩りができてなおかつ本土からのアクセスが容易とされる文巷集落に体験客が集中している。また、2007年から漁村体験村の運営を始め、体験村事業開始が比較的最近となる鎗浦集落は、「全国漁村体験村コンテスト」で受賞されたことによって、観光客が増えている。これらの集落はしばしばマスコミに取り上げられ、観光客の訪問が相次いでいる。このような、マスコミによる集落に関する情報の発信は、内的には集落共同体としての住民らの一体感の向上に役立ち、外的には観光客の増加につながるため、集落の収入増加が期待される（アン、2008）。

表3は観光体験村で行われる体験活動の種類を

表3 体験村における体験種類（2013年）

テーマ	体験活動種類
農村生活体験	ニンニク茎取り（3）、耕運機乗り（2）、田植え（2）、ハウレンソウ取り（2）、ゆず狩り（2）、稲狩り（1）、うしぐわ引かせ体験（1）、ワラビ取り（1）等
漁村生活体験	潮干狩り（8）、魚つかみ獲り（8）、釣り（7）、フェバリ体験（4）、アナジャコ捕り（4）、網投げ魚取り（4）、アサリ取り（4）、竹防簾体験（2）、船上漁夫体験（2）等
伝統文化体験	伝統遊び（2）、農楽学び（1）、工芸（1）、ゆず石鹸づくり（1）、餅つき（1）、梔子染め（1）等
自然生態体験	森観察（1）
その他	ラフティング（1）、シーカヤック（1）、モーターボート（1）等

注）括弧内数字は体験メニューを行う体験村の合計。
（『2013年農漁村体験休養集落運営現況』より作成）

まとめたものである。体験テーマとしては漁村生活体験と農村生活体験の種類が多く、伝統文化体験、自然生態体験のそれは少ない。ほかに、海洋レジャーの体験メニューが少なからず用意されている。

特に、漁村生活体験は、潮干狩りと魚つかみ獲りが8集落で行われ、最も多くなっている。加えてアナジャコ捕り、アサリ取りの体験も多く、おもに干潟で行われる漁村生活体験が人気を博していることがうかがえる。その反面、農村生活体験の方は、ニンニク茎取り、耕運機乗り、田植え、ハウレンソウ取り、ゆず狩り等の体験メニューが多様に用意されているが、これらの体験メニューを運営する集落自体は多くない。南海島の特産品のニンニクを取り上げた、ニンニク茎取り体験も3集落の運営にとどまっている。これは、都市住民が農作業の体験活動をあまり選好しないことを示しており、オム（2006）は、農作業の体験活動に加えて自然学習型体験や山林浴といった自然志向的活動を取り入れた自然生態体験プログラムの開発を求めている。

3) 観光体験村の取り組み

ここでは、南海島内代表的な7つの観光体験村を対象として、観光体験村の運営実態を述べる。その調査結果をまとめたのが、表4である。

表4より個々の取り組みをみると、観光体験村の目的は「収入創出」と「地域活性化」、「訪問者との交流」、「地域文化継承」等である。このうち、「収入創出」はすべての観光体験村が優先する事業目的でもある。観光体験村では、「農漁業体験プログラムの運営」、「共同宿泊施設や農家の民泊体験」、「農水産物の直売や郷土料理の飲食」が行われている。これらはいずれも集落内で生産した農林水産物と住民の生活、自然環境を活かしている。

各組織の設立年度は、観光体験村に選定された時期と同じで、島内体験村第一号は2001年に漁村体験村に選定された「知足集落」である。観光体験村の指定年度と指定数をみると、2002年に2カ所（文巷、加川）、2004年に1カ所（新興）、2006年に1カ所（虹峴）、2007年に2カ所（赤梁、

表4 南海島における観光体験村を運営している地域組織の概要(2015年)

項目	集 落 名							
	虹峴 honghyun	赤梁 jukrang	文巷 munhang	知足 jijok	鎗浦 yupo	加川 gacheon	新興 shinhung	
事業名 (主管部署)	農村体験村 (農林畜産食品省)		漁村体験村 (海洋水産省)			農村伝統テーマ村 (農振庁)		
指定年度	2006年	2007年	2002年	2001年	2007年	2002年	2004年	
主要事業 ¹⁾	体験P 宿泊 飲食物 農産物	体験P 宿泊	体験P 宿泊 飲食物 農産物	体験P 宿泊	体験P 宿泊 飲食物 農産物	体験P 宿泊 飲食物 農産物	体験P 宿泊 飲食物 農産物	
事業目的 ²⁾	収入	収入 地域	収入 地域	収入 地域 訪問者	収入	収入 地域 文化継承	収入 地域 訪問者	
所在地	南面	昌善面	雪川面	三東面	西面	南面	昌善面	
運営主体：責任者 (担当者)	里長 (事務長)	委員長 (事務長)	漁村契長 (事務長)	漁村契長 (事務長)	漁村契長 (事務長)	里長 (事務長)	里長 (事務長)	
住民参加 状況	参加住民 数(人) ³⁾	—	20 / 206	70 / 160	48 / 106	35 / 65	70 / 105	50 / 168
	参加 条件	住民	住民	住民	住民	漁村契員	住民	住民
体験メニュー	<ul style="list-style-type: none"> ・農作業 ・魚つかみ 獲り(石 防簾⁴⁾体 験) 	<ul style="list-style-type: none"> ・農作業 (わらび 取り) ・釣り 	<ul style="list-style-type: none"> ・農作業 ・潮干狩り ・魚つかみ 獲り 	<ul style="list-style-type: none"> ・潮干狩り ・魚つかみ 獲り(竹防 簾体験) 	<ul style="list-style-type: none"> ・農作業 ・潮干狩り ・魚つかみ 獲り 	<ul style="list-style-type: none"> ・農作業 ・海体験 (網投げ) ・工芸品づ くり 	<ul style="list-style-type: none"> ・農作業 ・潮干狩り (フェバリ⁵⁾) 	

注1) 体験P：体験プログラム，飲食物：飲食物販売，農産物：農産物販売

2) 目的→収入：収入創出，地域：地域活性化，訪問者：訪問者との交流，文化継承：地域文化継承

3) 参加住民数/総人口，虹峴は回答なし。

4) 海岸に石を積み，満ち潮になれば魚が入り，引き潮になって水が引いた時に，石垣の中に残った魚を捕る伝統漁法である。知足集落の竹防簾は，竹を積む場合である。

5) 松明を持って夜中に漁労行為を体験すること。おもにタコを捕る。

(2015年3月のアンケート調査より作成)

鎗浦)である。ここで取り上げていないほかの観光体験村の指定年度とも合わせてみると，2000年代初盤に指定された観光体験村が多くなっている。このように，南海島は観光体験村事業を積極的に進めてきていることがわかる。体験メニューには，田植え等の農作業体験と潮干狩り，魚つかみ獲り等の漁村生活体験があげられ，漁村生活体験を進める観光体験村が多い。

また，事業の運営主体は集落の指導者(里長や漁村契長)と事務担当の事務長からなる。事

務長は体験メニューの開発・運営，事務管理等を行うエキスパートで，観光体験村の事業を効率的に運営することを目的に2005年から実施された「事務長制度」⁹⁾によっている(パクほか，2012：69)。

住民参加の状況を見ると，全住民数に対する事業参加住民数にはばらつきがみられる。全体的な傾向としては，全住民の半数が参加する場合と少人数の参加の場合に分かれる。後者の原因として，農・漁業の生産規模が大きく，その作業が優

先されることと、個人の仕事を重視するため観光体験村への参加が困難であることがあげられる。たとえば、「虹峴集落」は数名の中年男性によって観光体験村が営まれている。特に、女性の参加が低調で、これは集落内の海岸沿いにペンションが多く経営されており、大半の女性がペンションでの掃除等の仕事に携わっているからであるという¹⁰⁾。また、体験客数において島内首位を占める「加川集落」では、全住民向けに観光体験村への参加を呼びかけているものの、思ったほど集まらず、現在では、住民の自律的な参加に任せているという¹¹⁾。事業参加者数は、民泊を営む世帯を含めば70人にのぼるが、実際のところ、体験事業は、体験進行役の8人体制で運営されている。このため、農作業等の体験客数を一回80人に制限している。

他方、「文巷集落」は住民の半数が観光体験村事業に参加している。観光体験村開始の当初は、少人数で運営されていたが、その後、観光客の増加とともに事業運営に対する葛藤が住民の間に生じたという。現在は、「輪番制」¹²⁾で大勢の住民参加を図っている。「鎗浦集落」は観光体験村の

参加資格を「漁村契」に属する会員に限り、たまに非会員の参加も認めているという¹³⁾。これは、漁村体験村が、漁業人の活動組織である「漁村契」を中心に運営される方針となっているからであり、「文巷集落」の場合は「漁村契」のみならず集落ぐるみでの態勢をとっていることを示す。漁村体験村の場合は、その事業運営による収入の一部を住民に配分¹⁴⁾している。以上から明らかのように、漁村体験村において、その事業が集落共同事業であるという住民の意識は他の観光体験村の住民に比べて強いといえよう。

4) 利用施設の現況

7つの観光体験村の運営する利用施設の現況をみると、利用施設には体験施設、宿泊施設、便宜施設、農産物販売施設がある(表5)。このなかで、体験館と共同宿泊施設、駐車場、休憩所は、すべての観光体験村に存在し、これは観光体験村造成事業の際に、整備されたものである。ただし、体験館を共同宿泊施設と兼用で使用する集落もある。また、食堂は、「観光体験村コンテスト」等で受賞された時に支給される支援金で造ったもの

表5 観光体験村における利用施設の現況 (2015年)

区 分		虹峴	赤梁	文巷	知足	鎗浦	加川	新興
体験施設	体験館	○	○	○	○	○	○	○
	集落会館 ¹⁾	○	○			○	○	
宿泊施設	共同宿泊施設 ²⁾	○	○	○	○	○	○	○
	農家民泊(軒) ³⁾	11	4	32	13	14	19	20
便宜施設	駐車場	○	○	○	○	○	○	○
	休憩所	○	○	○	○	○	○	○
	食堂			○		○		
	その他					プール		
農産物 販売施設	販売所			○	○		○	○
	ネット販売	○		○	○		○	○
	その他		個人 販売			不定期 直売	個人 販売	

注1) 虹峴は宿泊客数に応じてたまに集落会館を使用し、赤梁は団体客50人の時、使用する。

2) 虹峴、赤梁、新興、加川の4集落は体験館を利用している。

3) 「南海島文化観光」参照。tour.namhae.go.kr/main (最終閲覧日: 2015年2月23日)。

(2015年3月のアンケート調査より作成)

で、2集落が食堂を有する。

宿泊施設としてはおもに共同宿泊施設が利用されており、観光客数に応じて集落会館が利用される場合もある。住民の経営する民泊も宿泊施設として利用される。民泊の多い集落は、文巻（32軒）、新興（20軒）、加川（19軒）であり、赤梁（4軒）は最も少ない。民泊の数は、おもに観光客の多少によっており、こうした民泊は地元住民にとって新たな経済活動となると同時に、高齢化と人手不足から生じる農漁業等の収入減を補う手段となっている（鄭，2015）。

一方、図3によると、体験客数が多くない「新興集落」で20軒もの民泊が営まれている。「新興集落」では、フェバリ体験、ゆず狩り体験等の体験メニューと農家民泊を合わせたパッケージ商品¹⁵⁾を販売している。これが、農家民泊の開設を促した要因である。

農産物販売所を設けているのは4集落であり、インターネット販売は5集落で行っている。しかしながら、農産物の販売状況は順調ではないようである。ほかに、住民による路上販売や集落で行う不定期市場がある。農産物販売は、体験、宿泊と並んで個人収入が得られる手段であるため、観光体験村を訪れた都市住民に地元産の農産物を宣伝・販売し、農産物販売による収入の確保が課題となる。

IV おわりに

本研究は慶尚南道南海島を対象とし、韓国農漁村地域で行われる、地域資源を活かした観光体験村の運営実態を明らかにすることを目的として行ったものである。研究の結果は以下のようにまとめられる。

観光体験村は、農漁村地域の人口減少による働き手不足、農家収入の減少といった当面の問題を解決しようと韓国政府によって進められた支援事業に選定された集落である。2001年以降、農村体験村、漁村体験村、農村伝統テーマ村等が全国約1,900カ所に造成され、運営されている。

観光体験村に選定された集落には、おもに2～5億ウォンの事業費が交付され、事業費は体験館

と共同宿泊施設、駐車場、案内施設、食堂等のインフラ整備に使われている。観光体験村にはどこでもたいてい同様な施設が完備されている。

南海島には、15カ所の観光体験村がある。観光体験村では潮干狩りの漁村生活体験や田植えの農村生活体験、伝統文化体験等が行われている。なかでも、漁村生活体験を営む集落が多く、潮干狩りは多くの観光体験村で行われている。農村生活体験のメニューは多様であるものの、1～3集落でのみ運営されている状況である。都市住民の余暇需要に合わせた農村生活体験メニューの開発が求められる。観光客は、潮干狩りや伝統的な生活が体験できる、有名な観光体験村に集中する傾向がみられた。

島内の7つの観光体験村に対する調査では、観光体験村事業の目的として「収入創出」、「地域活性化」、「訪問者との交流」、「地域文化継承」があげられ、中でも「収入創出」が重要視され、観光体験村事業の目的を農外所得源とする韓国政府の意向が集落にも浸透していることを示している。ほとんどの体験村で潮干狩りや魚つかみ獲りが行われ、漁村生活体験の人气が確認された。

一方、観光体験村に対する住民の参加には違いがみられた。集落内農漁業の生産規模が大きい場合や、住民個人の仕事が多い集落では住民の参加が期待できず、少人数での体験村経営が成り立っている。その一方、「漁村体験村」の場合は、「漁村契」の会員を中心に事業運営が行われるため、安定した住民の参加が保たれている。

観光体験村の利用施設には、体験館、共同宿泊施設、休憩所、駐車場が整備され、運営されている。これらの施設は観光体験村造成事業の際に建設されたものである。宿泊施設には、共同宿泊施設や集落会館を利用するパターンに加え、住民の経営する民泊が利用されている。民泊が多い集落は、観光客が多い集落でもあり、これは、観光客の増加にともなう観光体験村の波及効果によるものとみなされる。農産物販売所は4集落で運営されている。ほかに、住民による路上販売や集落で行う不定期市場をとおして農産物の販売が行われる。農産物販売の収入はそれほど多くなく、この点の改善が求められる。

以上のように、南海島における観光体験村の運営は、訪問者数や事業への取り組み方等によって異なっていた。観光体験村には、今後とも観光客の増加が期待される中、観光体験村による収入の向上、地域活性化を見据えた住民参加の拡大、観光客の需要に合わせた多様な体験メニューの開発、農水産物の販促といった新たな対策が求められる。

謝 辞

現地調査においては南海島の行政担当の方々および各「観光体験村」の事務長の皆様に大変お世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。本調査は、2015年度立教大学学術推進特別重点資金（立教 SFR）の助成を受けて実施しました。なお、本稿の一部は2015年第30回日本観光研究学会全国大会（高崎経済大学）にて発表しました。

注

- 1) 実際のところ、集落の自己負担に対する住民の理解がまとまらず、事業運営に苦勞する集落もある。
- 2) 宿泊運営においては、「公衆衛生管理法」上、宿泊業規定を受けない適用排除となる。ただし、一定の水準の消防施設を備えること。また、飲食の提供においては、「食品衛生法」上、適用特例とし、喚起施設や冷蔵庫等の施設を備えることによって建物構造は改修しなくても営業施設設置基準をみなすこととなる。
- 3) 農林畜産食品省報道資料（2013年度農村体験休養村現況）による。
<http://www.mafra.go.kr/>（最終閲覧日：2015年2月1日）
- 4) 2013年3月より農林水産食品部省から分離して、海洋水産省となった。同時に、漁村体験村事業の担当も農林水産食品部省から海洋水産省へ移管された。
- 5) 「等級審査制度」は、都市・漁村間の交流を促進するとともに漁村の社会・経済的活力を増進させ、また都市住民の漁村生活に対する体験と余暇需要を満たし、都市と漁村の均等ある発展を目指している（海洋水産省、2007）。
- 6) 海洋水産省報道資料（2015年7月1日付）による。南海島では文巷集落と鎭浦集落の2カ所が「一等集落」に、知足集落は食堂部門を抜きにした「一等集落」に選ばれた。
- 7) 筆者による観光客対象の調査によると、訪問客が多い都市は大邱市、釜山市、蔚山市の順である。
- 8) 主要施設入場者と海水浴客数、体験村体験客数の合計である。「南海島統計年報」<http://stat.namhae.go.kr/html/>（最終閲覧日：2015年10月30日）
- 9) 事務長の給料は最大5年間、月120万ウォンの範囲で支援される。事務長採用の費用は、国費（70%）と、地方費（20%）、集落の自己負担（10%）で賄われる（パクほか、2012：69）。
- 10) 集落主催のフェスティバルのときは、青年会と婦人会の協力を得る。2015年8月の事務長へのインタビューによる。
- 11) 2015年8月の事務長へのインタビューによる。
- 12) 「輪番制」とは、文巷集落は6つの班に分かれており、各班を基準に参加住民の順番を決める形式をいう。2015年8月の事務長へのインタビューによる。
- 13) 参加者の傾向をみると、70～80%が漁村契員で、15～20%が非会員となる。2015年8月の事務長へのインタビューによる。
- 14) 「鎭浦集落」では漁村契員への利益配分を優先的にを行い、事業収益が多いときは、全世帯対象に実施する場合もある。または、物品を住民へ配布する。「文巷集落」の場合は、事業収益を基金に充てておき、不定期的に全世帯にある程度の金額を配分している。
- 15) 「新興集落」のパンフレットによると、1泊2日体験パッケージは1泊3食4体験から構成される。体験パッケージは3種類あり、フェバリパッケージ（大人1人64,000ウォン）、船上漁夫体験パッケージ（同上74,000ウォン）、秋季収穫パッケージ（同上66,000ウォン）である。

文 献

- 鄭 玉姫 (2015)：韓国・慶尚南道南海島における民泊の動向。観光研究, 26 (2), pp. 85-94.
- 안중현 (2007)：주민참여에 의한 농촌관광 마을 만들기：장흥군 진목마을을 사례로. 한국경제지리학회지, 10 (2), pp. 197-210. [안·존히ョン (2007)：住民参与による農村観光づくり：長興郡진목集落を事例にして. 韓国経済地理学会誌, 10 (2), pp.197-210.]
- 안중현 (2008)：마을축제를 통한 농촌관광마을 만들기－못생긴호박축제 방문객을 사례로－. 문화관광연구, 10 (2), pp. 127-140. [안·존히ョン (2008)：村祭りをとおした農村観光集落づくり－ブスカボチャ祭りの訪問客を事例にして. 文化観光研究, 10 (2), pp. 127-140.]
- 엄봉훈 (2006)：그린투어리즘을 위한 농산어촌 체험마을 현황 분석－농촌관광 인터넷 포털사이트 분석을 중심으로－. 농촌계획, 12 (4), pp. 125-133. [오ム・ボンフン (2006)：グリーンツーリズムのための農山漁村体験村の現況分析－農村観光インターネットサイトの分析を中心にして. 農村計画, 12 (4), pp. 125-133.]
- 해양수산부 (2007)：2007년 어촌체험마을 혁신경진대회. [해양수産省 (2007)：2007年漁村体験村コンテスト.]
- 해양수산부 (2014)：어촌체험·휴양마을 지정안내서, 133p. [海洋水産省 (2014)：漁村体験・休養村指定案内書, 133p.]
- 고선영 (2008)：농촌체험 관광마을의 장소자산과 유형：

- 경기도 농촌 체험관광 마을을 사례로. 한국지역지리학회지, 14 (4), pp. 418-435. [코·손욘 (2008) : 農村体験観光村の場所財産と類型 : 京畿道農村体験観光村を事例にして. 韓国地域地理学会誌, 14 (4), pp. 418-435.]
- 성귀만·이갑두 (2014) : 농촌체험마을의 체험 유형과 운영 특성이 고객만족도에 미치는 영향. 2014년 경영학 관련통합학술대회 논문집, pp. 2176-2198. [손·기만 / 이·갑두 (2014) : 農村体験村の体験類型と運営特性が顧客満足度に及ぼす影響. 2014年経営学関連統合学術大会論文集, pp. 2176-2198]
- 정구조·진현정·설봉식 (2009) : 농촌체험 관광이 농특산물 구매 및 직거래에 미치는 영향. 농촌경제, 32 (4), pp. 35-56. [치ョン·그즈 / 진·히ョン지ョン / 솔·폰싱크 (2009) : 農村体験観光が農特産物購買および取引に及ぼす影響. 農村經濟, 32 (4), pp. 35-56.]
- 남해군 (2011) : 2011년 농어촌체험마을 운영현황. pp. 1-3. [南海島 (2011) : 2011年 農漁村体験村運営現況. pp. 1-3.]
- 남해군 (2013) : 2013년 농어촌체험휴양마을 운영현황. 197p. [南海島 (2013) : 2013年農漁村体験休養村運営現況. 197p.]
- 남해군 : 통계연보 [南海島 : 統計年報]
<http://stat.namhae.go.kr/html/> (最終閲覧日 : 2015年10月30日)
- 남해군지편찬위원회 (2010) : 남해군상, pp. 56-57. [南海島誌編纂委員会 (2010) : 南海島 (上), pp. 56-57.]
- 박시현·김용렬·권인혜·류경선 (2012) : 농촌관광의 새로운 방향과 정책과제. 한국농촌경제연구원 기본연구보고서, pp. 40-45. [박·시현 / 김·용렬 / 권·인혜 / 류·경선 (2012) : 農村觀光の新たな方向と政策課題. 韓国農村經濟研究院基本研究報告書, pp. 40-45.]

鄭：韓国・慶尚南道南海島における観光体験村の運営



写真1 潮干狩りを楽しむ観光客 (2015)
(2015年8月 筆者撮影)



写真2 文巷集落の総合案内所 (2015)
(2015年3月 筆者撮影)



写真3 加川集落の散策路 (2015)
(2015年8月 筆者撮影)



写真4 虹峴集落の石防簾体験 (2015)
(2015年8月 筆者撮影)